

海という聖なる領域を織り込む —サンマテオ・デル・マルの先住民イコーツの織り手たち—¹

ディアナ・マンソ



完成した作品を見つめるファナ

*Ajayiw, ajayiw
Ngomajaw ndoj ajayiw
Naag owixaw nejiw
Naag jarüinch
Kambaj iüt, nangaj ndek
Ndedaamb ayaj apakajchiw*

織って、また織って
けっして織るのを止めない
自らの手と
糸を使って
私たちの領域である海は
いつも、いつまでも守らなければならない
—レスビア・エセアルテ
イコーツの詩人・ラップ歌手

「海は穏やかではない。一人の人間のような。私たちと同じように生きている」と、オアハカの太平洋沿岸の共同体サンマテオ・デル・マル〔以下サンマテオと略〕に住む先住民ウアベ、つまりイコーツの女性ファナ・バロネス・セペダは語る。後帯機の優れた織り手の先住民女性は、数千年もの文化を取り戻し守るための記憶として、領域や海の歴史を木綿糸で紡ぎだしている。

彼女たちは、以前は風力発電基地、現在は両洋連結回廊計画（CIIT）に反対してきた。先住民イコーツの女性は、2017年9月の地震、そしてコロナ禍を生き延びてきた。サンタテレサ砂洲に132基の風力発電塔を設置するため領域の略奪を画策した風力発電企業に対しても、彼女たちは抵抗してきた。彼女たちの闘いはまさに海を守る闘いだった。

「海はすべてである。海はイコーツの女性に生命を与えてくれる」と、彼女たちは語る。

領域を防衛するものとしての織物

機織りに関する知識を生き字引のように保持する彼女たちから見ると、織物を手にする人は布だけでなくサンマテオの歴史の一片を持ち帰ることになるという。イコーツ文化の保持者で活動家のウゴ・アルベルト・イダルゴ・ブエナビスタは、海という存在が人々にサンマテオの自治を構築し、再生する可能性を提供すると説明する。人々は海を糧にして生きているからである。何世紀もの長い間、サンマテオの人々は漁業で生き延びてきた。だから人々は海を大事にする。

この先住民作家は次のように力説している。「イコーツの人々は抵抗する。人々は海がすべてであると知っているからである。織物に携わる女性たちだけでなく、織物を手に入れ家に持ち帰る人にとっても、文化や抵抗を伝える織物のなかに海が体現化されている」

「イコーツの人々にとり、後帯機による織物技術は図形で表現された書き物のようなものである。先祖伝来の知識を受け継ぎ、イコーツ語の言語的アイデンティティは海をめぐる日常生

注1 出典：Diana Manzo, “San Mateo del Mar: Tejiendo el mar”, *Desinformémonos*, 17 de octubre 2022

翻訳：成田有子、杉井道子、福間真央、鋤柄史子、藤井満、小林致広

活と密接な関係にある」と彼は説明する。後帯機は「世界で唯一無二のイコーツ民族の抵抗や存在を表現する方法」にほかならないと、イダルゴ・ブエナビスタは考えている。

イコーツの織物の起源に関する詳しい研究はないが、現在でも織物の技術は、聖なる土地、「私たちと一体の物 (nangaj iüt monopoots)」を防衛することに関連していると、先住民研究者は指摘する。それはラグーナ、大海、聖地、木々、人々と共生するすべての動物を指している。「この領域のすべてが、織物のなかに体现されている。私たちが共同して守ってきたのは聖なる領域である。領域は狙われ続け、風力発電会社や多国籍企業の巨大開発計画が侵略しようとしてきた。巨大開発計画はイコーツやテワンテペク地峡の人々に多くの紛争をもたらした」と、研究者は述べる。

聖なる海への愛



ロムアルダの作品



オリーブの木の下で機織りするロムアルダ・パロネス・セペダ

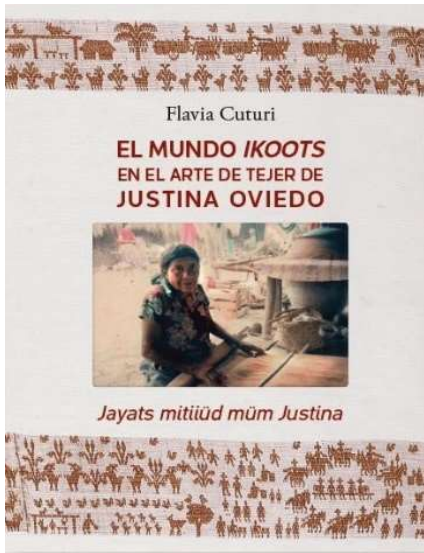
穏やかな顔つきだがたくましい手をした女性が、葉の生い茂ったオリーブの木の下でインタビューを受けながら、木製の織り機でウィピルを織っている。彼女は聖なる海への愛についてイコーツ語で語る。彼女は領域に広がる海を聖なる海と呼んでいる。彼女はロムアルダ・パロネス・セペダ、79歳である。

彼女は「名人技の持ち主」として共同体で知られている。12歳からで村の歴史を木綿糸で織り始めた彼女の織物の技術は、娘や息子、孫たちまで伝えられている。共同体にある木を精巧に加工した10本を組み合わせた機織り機をシウル (xiül) という木の棒に結わえている。織り機は帯で腰と繋がっている。かつて帯はヤシで編まれていたが、今は革製である。

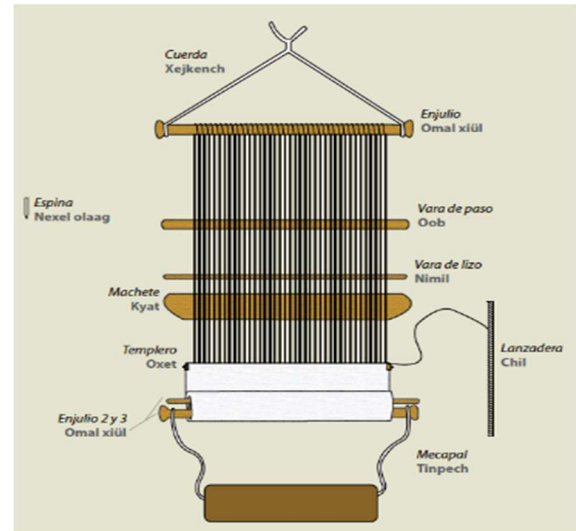
スカートと花模様のウィピルを着た素足のロムアルダは、手を休めることなく織り続ける。木製の針でしつけ縫いをする際、木綿糸で海や領域をイメージすると、彼女は語る。領域には、エビやカニ、魚、ペリカン、亀、さらに「不可欠」な漁師がいる。同時に、蝶や犬、リスやヤシ、山羊、トウモロコシ、農民も描かれる。身の回りなるすべてのメージが紡ぎ出される。

「聖なる海がなければ、私たちは何者でもなくなってしまう。海は私たちを助けてくれる。海からすべてのものが生まれるから」と、ロムアルダは語った。「織ることは詩を紡ぐようなものよ。織物の配色と形状は詩句や韻律に相当し、領域にあるものを織糸で創造している。そして織物の技を評価できる人たちと分かっているのよ」と、彼女の仲間は説明してくれた。

ロムアルダは織ることを楽しんでいる。物静かで内気な彼女は、儀礼のように織物をするすべてのイコーツ女性と同じように、自分の仕事をとても大切にしている。女性たちは漁のために海に出かける必要はない。なぜなら、彼女たちはずっと守り続けてきた伝統的で宗教的な生活の一部として海を紡ぎ出しているからである。



フラビア・クトゥリ
『フスティナ・オビエド
の織物に表れたイコーツ
世界』
(2017年 Carteles
Editores)



後帯機の構造

『フスティナ・オビエドの織物に表れたイコーツ世界』で、著者で人類学者のフラヴィア・クトゥリは、祝祭であれ日常であれ、女性の活動が中心的な役割を果たしていると指摘している。彼女の説明では、イコーツの女性は家族や祭りのマヨルドモの家のために食事を用意し、市場で売り、菜園や家畜を世話し、様々な儀式に参加している。共同体の子どもに継承する儀式的活動の一つとして織物に携わっているロムアルダのような女性についても記述されている。

「織物ができれば、サンマテオに活気を与えられる。誰も子どもに織物を教えないと、私たちの知識は死に絶える。当然、聖なる海、領域も死ぬ」と、ロムアルダは語る。母親の機織り機のそばで長く過ごした彼女は、母親の手際よい動きを観察しながら機織りを学んできた。

風力発電に対する 13 年の抵抗

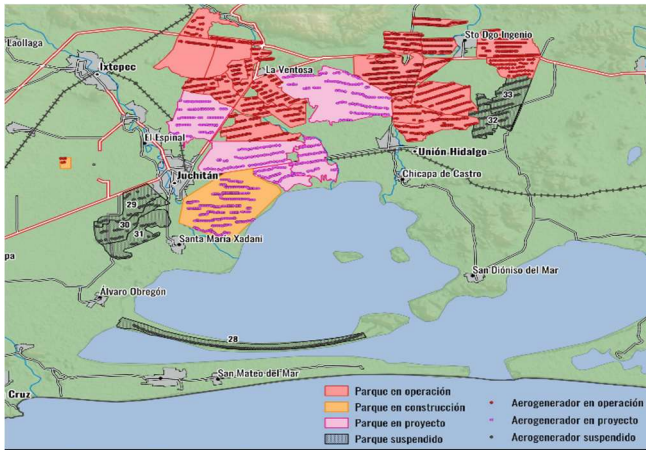
男性は漁業、女性は織物に携わるイコーツの人々は、近年、共同体で起きている分断や紛争に由来する不安や恐れに苛まされている*²。CIIT に由来する問題、風力発電に対するイコーツの人々の闘い、漁獲量減少に見られるラグーナの汚染について今は誰も語ろうとしない。以前なら話していたが、今年の夏は警戒心が強くなっている。誰もがトラブルを避けようとする。

現在、オアハカ州のフチタン、サントドミンゴ・インヘニオ、イシュタルテペク、ウニオン・イダルゴ、エル・エスピナル、イシュテペク行政区では、28 の風力発電基地が操業している。23 基地はおもにスペインとフランスの企業によって操業されている。ひとつの基地は電力自給のため国防省と直接契約されている。残る 4 つの基地は連邦電力委員会の管轄下にある。すべてともいえる海、小砂丘、乾季になると干上がるラグーナ、サボテン、低木やヤシなどに囲まれるサンマテオは、環境や文化を保全するため、その領域を守り続けてきた。

2009 年秋、後にマレナ・レノバブレスに名称変更したプレネアル社は、イコーツの人々が共同利用している土地 4,700 ヘクタールに風力発電塔 132 本を設置するため、協定を持ち掛け、交渉しようとした。そのサンタテレサ砂洲は、公的にはサンディオニシオ・デル・マル行政区に属しているが、イコーツが居住する行政区の漁師はだれでも漁業活動をすることができた。

住民集会で、地元住民は契約期間 30 年という風力発電基地計画を拒否した。情報提供が不十分であり、漁業水域やマングローブ地帯に悪影響を及ぼすと思われたからである。風力発電基地が地峡部に到来し、風力発電企業はこの領域に食指を伸ばし続けている。何度も開催されたフ

注 2 2020 年 6 月 21 日、行政区西部のウアサントラ・デル・リオで 15 名殺害事件が発生し、行政区首長が不在となり、2022 年 8 月の慣習選挙の投票を控えていた。



地峡部の風力発電基地分布



サンタテレサ砂洲とサンタマリアへの風力発電塔建設計画

オーラムでは、起こりうる様々な環境ダメージに関する情報提供が行われてきた。

2005年、「地峡部風力発電回廊—民間企業による風力エネルギー開発の環境、経済、社会、文化に与える影響」という地域フォーラムが開催された。ラグーナ・スペリオルの水域にあるサンタテレサ砂洲への風力発電計画は、マングローブの生態系に深刻な危機をもたらす恐れがあることが知らされた。マングローブ地帯が傷けられ、サンマテオの生産や食料基盤である多くの水生動物や鳥類にも深刻な影響が出ることもわかった。つまり、イコーツの女性たちがマントに刺繍していたもの、文化や民族としての存在そのものが危機にさらされるということを人々は理解したのである。

風力発電が操業されているほかの都市や国々での経験から、土壌、川、ラグーナや水域が、発電塔で使用される油の漏出、発電基地の建設で生じる廃棄物の蓄積などで汚染されるとも言われていた。土壌侵食、植生の喪失、美観の消滅や景観破壊も、発電塔の設置がもたらす悪影響として挙げられる。こうした要因が、鳥類を追い払いやり漁業に影響を与えているタービン翼の振動や騒音などとともに、風力発電塔設置を拒否する人々の最大の動機である。

世界保健機構は、風力発電塔は一番近い住宅から 2.5km 以上離れて設置すべきと指摘している。騒音分析の専門家の工学士ヘスス・アキノ・トレドは、専門チームとともに、ウニオン・イダルゴ、ラ・ベントサにある3つの基地を調査し、住宅と発電塔の距離が 500m しか離れていないことを突き止めた。オアハカ州では世界保健機構が推奨する距離は守られず、発電塔と住宅の間隔を 8km とする国際健康規格はまったく順守されていないことが確認された。

共同体の最高意思決定機関の集会在風力発電計画を拒否した要因として、イコーツの組織、儀礼性、海への敬意だけでなく、ラジオ・イコーツの情報伝達があったことを地元住民は指摘する。巨大開発計画の承認を否定したサンマテオは、2009年10月攻撃にさらされた^{3*}。

サンマテオの領域は風力発電の立地場所として極めて適している場所とされていた。サンマテオからほんの数キロの所に、サリナクルスのアントニオ・ドバリ・ハイメ精油所がある。現在、アンドレス・マヌエル・ロペス・オブラドール大統領の肝入りの計画のひとつに CIIT があるが、その一環として、巨大な防波堤が建設されている。しかし、大統領は計画が先住民イコーツの共同体に与える影響を何も考慮していない。例えば、サンマテオの7地区のひとつであるクアウテモクでは、巨大事業が領域にもたらした環境変化のせいで、2022年には以前より多くの洪水に見舞われるようになった。

注3 10月18日には、東隣のフチタン行政区のサンタマリア・デル・マルとの境界標識が破壊され、10月19日には西隣のサンペドロ・ウィロテペック行政区との農地紛争にともなう衝突で8名が負傷した。



ウニオン・イダルゴの集落から 500m にある風力発電塔



クアウトモック地区の 2022 年 9 月の洪水

国際平和ブリガダ（PBI）メキシコ支部の 2009 年の報告書『オアハカ地峡の先住民族の権利と風力発電基地』によると、大規模な風力発電計画やスペイン企業プレネアル社にとって、サンマテオは計画に最適の場所と評価されていた。しかし、サンマテオの住民集会は総意として風力発電計画を拒否したことを指摘している。その報告書のなかで、テペヤク人権センター代表ハビエル・バルデラスは、イコーツの土地を占有しかねない巨大開発計画の到来に関して丸一年をかけて共同体全体で社会啓発活動が行われ、土地略奪を容易にする共同体代表の法的認知をいかにして防いだかを説明している。彼の指摘によると、「村が風力発電計画を引き受ければ、村の当局者に 800 万から 1,000 万ペソが支払われていた。道は未舗装、下水道は未整備、水道管もないずっと見捨てられてきた村にとって、この金額は途方もないものだった」

研究者ウゴ・アルベルト・イダルゴ・ブエナビスタは指摘している。サンマテオはテクノロジー自体に反対はしない。反対するのは、風力発電が地域の自然資源を乱開発し、サンマテオにある聖なるもの、つまり海や文化やイコーツ語を根絶することである。さらに海に生息するものを刺繍している織物までも根絶することである。「私たちイコーツの男女は芸術や闘いを通じて聖なる領域や海を守り続ける。そのため、私たちはずっと長く抵抗している。すべては私たちの海、領域、環境を守るためである」と、研究者は明言する。

儀式で満ちているこの土地にある海や環境の防衛は、歴史と文化、織物をする女性、食物を確保するため早朝や夕刻に青い水平線の彼方に出かける男性によって担われている。「私たちの海から獲れるエビや魚を食べることは聖なる行為であるから、私たちはそれを大事にする。私たちの海は、私たちの心、本質であるから、守られている。私たちは風力発電から海を守ってきたし、これからは CIIT から海を守ることになる」と、イダルゴ・ブエナビスタは確認する。



CIIT 計画の 10 工業団地と二つの港湾施設



サリナクルス港に建設の長大な防波堤

サンマテオの共同体集会は、様々な機会に、太平洋と大西洋の風が合流するこの土地に風力発電基地や CIIT など巨大開発計画が押し付けられ、共同体の生活は攻撃されていることを明らかにした。CIIT には 6 つの工業団地とサリナクルスとコアツコアアルコスを結ぶガスパイプラインが含まれる。「コンクリート基盤は、水の流れる回路、帯水層を閉鎖し、私たちの海が影響を受けることとなる。海がなければ食物がなく、食物がなければ生命がなく、生命がなければサンマテオもなくなる。私たちが声を上げ要求しているのは、生命のため、領域のため、環境のため、私たちの海のためである」と、インタビューした女性の織り手の一人は言っている。

集会では、海と領域を売ることは決してしないと強調され、サンマテオの社会的政治的な伝統基盤であるカルゴシステムを強化するため、自治的な方法で組織化し続けることが強調されている。サンマテオは、慣わしと慣習による内部規定の体系で統治されている。

「ここに風力発電は入れなかった。今後も入れないだろう。政党政治などがもたらす分断で私たちは疲れ切っている。私たちが望むのは自治や海に対する敬意である」と、集会で人々は強調する。優先すべきことが未整備のまま、当局者や企業は地域に巨大開発計画を押し付けるなど、集会で人々は強調する。「飲み水は不足し、週 3 回も停電し、病院は放置され、安定した仕事もない」と、地元住民は告発する。海と領域を防衛するための抵抗に終わりはない。風力発電企業に勝利した記憶は、いくつかの紛争にもわらず、地元住民を結束させている。

イコーツ女性のマンドル(テーブルクロス)

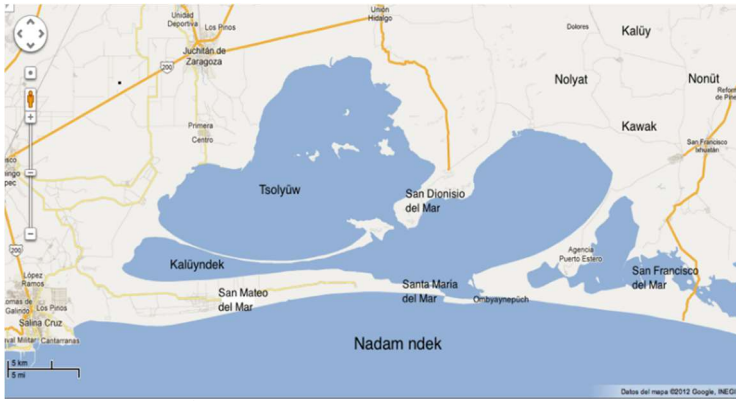
織物には年齢など関係ない。サンマテオ (Tikambaj) では、女の子も男の子も糸を紡ぎ、織り機を組み立て、機織りを習得する。祖母や曾祖母と同じように、母の胎内にいる時から、織りの技術を感じ取っていたからである。

太平洋に面する地峡の海岸平野にあるサンマテオには大波が打ち寄せ、灼熱の太陽が大地を焦がす。何千年も続く村の生活は次のようなものである。午前や午後、男たちは漁をするため、カヌーでティレメ海 (kalüy ndek) へと散らばっていく。キリオ潟 (kawak ndek) の岸で漁をする人もいる。ほかの男たちは山羊や牛を放牧する。この共同体の生活は、生活のなかで重要なトーテム動物の亀のようにゆっくりしているが、飛びたつペリカンのように素早い面もある。

サンマテオ行政区には約 1 万 4 千人が暮らしている。周辺の人々からは「ウアベ、あるいはマレーニョ」と呼ばれている。住民はイコーツ語を話す、この言語はメソアメリカ語族のなかに位置付けられていない。それは、南米あるいは中米の何語属に属するか確定していないが、中南米方面から人口移動があったことを示唆している。



イコーツの居住する砂州とラゲーナ的环境



サンマテオ・デル・マル行政区の場所



役場町と近隣のコロニア

この行政区は、西はサリナクルス行政区、北西はサンペドロ・ウィロテペック行政区、北はラグーナ・インフェリオル、東はフチタン行政区サンタマリア・デル・マル地区に接している。主要な経済活動は漁業であり、イコーツの人々は何にもまして海を守っている。それゆえ、自分たちの領域に風力発電基地が設置されることを拒絶したことが説明できる。

女性の織り手たちは、3地区（第1区、2区、3区）で構成される役場町、そしてサンタクルスとサンパブロに住んでいる。スカートとウィピル、花柄やチェーンステッチの刺繍のはいった衣装をまとい、いつもプラスチック製のビーチ・サンダルを履いている。彼女たちはこの文化の共同体生活の重要な構成者であるが、女性たちが当局者を選ぶ選挙で投票できるようになったのは、2010年が初めてだった。

55歳のエステラ・デュプラン・エセキエルは、13歳の時に初めてマンデルを織ることを習った。マンデルはイコーツ文化にとって聖なるものとされるテーブルクロスである。商売に携わる女性は魚やエビを包むためにマンデルを使う。また邪視を避けるためや、洗礼式や結婚式で代父母にパンを渡す時にも使う。

土曜日、エステラの家には海からの微風が吹いてくる。彼女は小さな椅子に座って派手な彩色のマンデルを織っている。今、人々は伝統的な木綿糸に拘らず派手な彩色のマンデルを注文すると、彼女は語る。「昔、祖母が木綿糸を紡錘で撚っているのを見ていた。祖母は家の伝統の貝紫染めの糸を持っていた。今は木綿糸以外にも色々な糸を使っている」と、彼女は説明する。

マンデルは織り手が好んで織る作品ではないが、伝統的に最初に制作を学ぶものである。エステラにとってマンデルは自分の海にほかならない。なぜなら、海であるからこそ、織りを通じて、日々の暮らしや彼女を取り囲むすべてのものを防衛することについて語る事ができる。



市場などで商品を包むためのマンデル



貝紫で木綿糸を染める



浜辺に並んだカヌー



市場でエビを売る女性たち

漁師が海へ行く前に海に許しを請うように、エステラも木綿糸を巻き付けた木製シャトルを使う前に許しを請っている。「自分の織り機を見ていると、海を思い出す。海は夫の仕事の場所で、夫は毎日、エビ、カニや魚を獲ってくる」と、彼女は言う。

微笑む女性にとって、海は柔らかい穂のトウモロコシが広がる畑のようなものである。仕事で大事なものは、木綿糸で製品を織り上げることである。仕事は疲れるし、骨が折れる。背中、腰や眼にもガタがくるが、織ることは「私のすべてよ」と、エステラは繰り返す。

マンデルやほかの製品を購入した人は、サンマテオの一部、忍耐、ユーモア、生活そのものも持っていくことになる。こんなふうにエステラは思っている。彼女は次のように語る。男たちは木製のカヌーで漁に出かけ、食料を確保するため網を仕掛けるが、女性の織り手は男たちの活動に着想を得て、それを織り機で織り込んでいる。エステラにとって、海は銀行と同じようなものである。銀行と違って、海には現金はないが、食料、食物、魚、エビ、カニがある。

エステラのような女性の織り手はいくつもの仕事を担っている。彼女は機織りで刺繍するとともに、午前中は商いに出かける。漁師の夫が魚やエビを獲り、彼女が売りに行く。それから家に帰り、海の近くで織りをする。30年以上も前から彼女が続けてきた活動だ。

文化遺産

「私たちの歴史が減びないようにするため、娘には機織りを習わせたい。海が織物に刺繍され続けてほしい。さらにほかの海にも広げたい。そうなれば私たちの歴史は生き延びられるから」と、アナ・ラウラは語っている。彼女は、二重織りスカートを初めて織った女性としてイコーツ共同体で著名な織り手であるミュム・フスティナ・オビエドの姪孫である。アナは体育教師になりたかったが、祖母や母、そして家族全員が仕事としている生活に加わるようになった。家族では糸が生活の重要な一部となっている。

ラウラは生後4カ月の赤ん坊の母親で28歳という若い女性である。彼女に織物を教えたのは、ほかの織り手たちと違って、母親ではなく父親だった。「母が機織りをしている家庭に生まれた私は、母が機織りしているのを見て教えてくれるように言ったが、母にはそうする時間がなかった。ある日、母が商いに出かけ、家に戻ってみると、私は一枚のマンデルを完成させていた。私に機織りを教えてくれたのは父なの」と、彼女は陽気に語る。

アナが語るには、初めてマンデルを作る際には、母親の余った糸を使って織ったという。糸を巻いた棒を地面に立てて覚えたという。今、彼女が織っているモチーフは、カメやエビ、さらに畑の溝を掘る犁を引く牛などである。アナにとって、サンマテオの織機の一つ一つが自分たちの領域が「生きている」ことを伝える機会となっている。



フスティナ・オビエド
(1938~2013年)



魚、カニ、エビ、タツノオトシゴ、鳥などのデザイン

織物の図像としては、ナレイン・ンディユク（トゲのないヘビ）、サツ・ンディユク（トゲのあるヘビ）、シェケル・ムバジ（小さな花）などの伝統的稲妻型模様や人間や動物を図案化したものがある。代表的なものは海洋動物、漁師や農民、海や川のカニ、エビ、魚、タツノオトシゴ、ペリカン、サギや尾長ムクドリモドキ、さらに花や畑、樹木などの植物図像もある。

64歳のフアナ・バロエス・セペダにとって、孫娘たちに機織りを伝えることはとても価値のあることである。彼女にとっては、仕事を受け継ぐという問題ではなく、サンマテオの領域、海、畑、そして生活を愛するということになる。マホガニーの木の下にある木のテーブルの上で、フアナは織物を作るために使っている色んな糸を見せてくれた。彼女は藍やコチニールで自分が染めた糸のことを話してくれた。「去年、孫娘たちに教えたが、もうやり方を覚えている。一番上の孫娘はすでに7枚の作品を作り、年下の孫たちも3枚作った。彼女たちはもう織り方を知っている」と、彼女は誇らしげに説明してくれた。

フアナ自身は機織りがあまり好きでなかった。しかし、機織りは生活の糧でイコーツ女性のアイデンティティそのものと、母親に言われながら、無理やり習わされたと告白する。後になって、その通りであると分かったという。だから、トルティーヤやエビを売るなどほかの仕事に携わった後、孫娘たちに教えるため、再び機織りに取り組むことになった。

「末っ子だった私以外の姉妹は全員機織りの扱い方を知っていた。私が機織りを習わなかったので母は絶望していた。しかし、機織りを知っている従姉妹が私に教えてくれた。今では、そのことをとても感謝している。孫娘たちも機織りを覚え、もうマンデルを作っているから」と、フアナは言う。今、フアナは幼い頃の母親のように振る舞い、イコーツの織物を保持する生きた字引が失われないことを願っている。イコーツの織物は、アメリカ大陸全域の太平洋沿岸に住んでいたが今はなき多くの先住民族がどうであったかという生きた見本の一つである。



コチニールで染めた木綿糸



ニルテペック産の藍で染めた木綿糸



浜辺を歩む織り手たち（左から2人目ロムアルダ、中央フアナ、右端エステラ）

再生

ここサンマテオでは風が流れ、海のそよ風へとつながっている。女たちは、エビや魚をとって漁から帰ってくる男たちを眺めながら、風の音に合わせてスカートを揺らしながら浜辺を歩いている。それがサンマテオのお決まりの昼下がりの光景である。しかし、サンマテオの住民の過半数は極度の貧困にあえいでいるので、サンマテオのイメージはけっして牧歌的なものとは言えない。周縁化指数の度合いはかなり高い。2013年、サンマテオは飢餓撲滅全国キャンペーン〔2012年から2018年までペニャ・ニエト政権が展開した貧困地区での社会援助キャンペーン〕の対象だった。女性たちが初めて選挙で投票したのはわずか3年前だった*⁴。

こうした逆境に挫けることなく、ロムアルダ、エステラ、アナ・ラウラ、フアナ、そしてサンマテオの女性たちは、誰もが海と同じように、海とともに生きていることをよく知っている。彼女たちは、自分の家であるかのように浜辺を歩きながら、人生を謳歌している。サンマテオでは、次のように言われている。忘れたいことや感謝したいことは砂浜に置いておこう。彼女たちはまるで儀式であるかのように、砂のなかに足を沈め、足を濡らしている。そうすることで、「生命が守られているこの自然を再生させるとは何なのか」、彼女たちは思い起こしている。

注4 サンマテオでは1996年から政党選挙ではなく慣習選挙が実施されてきた。2010年初めて女性が選挙に参加したが、選挙権は役場町の住民に限定されていた。2018年末選挙で全住民が参加することになるが、クアウテモク区の女性の参加がなく、選挙は無効となった。2020年6月の虐殺事件を経て、2022年8月に初めて16地区の全住民参加の選挙が実施され、男女対等の原則で16役職の正副代表が選出された。